



## 近頃の若い者は

中区紙屋町 藤井 義昭

エジプトの遺跡にはすでに「近頃の若い者は…」という言葉が落書きされているらしい。(ウソかホントかは知らないのだが)

大体歳を取ってくると、近頃の若い者はなっとらん、という風に使われる。だけど大概の場合は、老人が勝手にそう思っているだけではなからうか。近頃の若い者は、少なくとも私が若かったころより優れていると思わされることも多い。

最近のテレビで「高校生クイズ」があり、決勝戦に「開成」と県立「船橋」が残り、15問先に正解した方が優勝とのことであったが、私にはどの問題もサッパリ分からなかった。三人がチームを組むのであったが、文化系、理科系ともに大学で教わるクラスの内容であり非常に高度である。それらをヤスヤス解答していく姿には圧倒された。

私が高校生のころを思い出して、とてもできるものではないなあと感心した。

またテレビで「鳥人間コンテスト」があり滑空部門で、500mを超す新記録が出た。もちろん、参加者は大学生クラスの若い人ばかりである。言ってみれば「そんなことしてどうする」といったものである。しかしどうにもならない。すなわち、利益にならないことに青春を賭けている姿には感激をした。飛ぶ台からすぐに落ちてしまう者もあり失笑を買うのであるが、そんなことより、あることに時間を忘れ、没頭している姿に感激した。

「なでしこ」と言えば現在では、女子サッカーとして日本では誇りになっている。確かに強くなっていることはその成績を見れば分かる。そしてそのメンバーの顔の良いこと。青春を賭けている姿には圧倒される。青春時代に経験するいろんな楽しいことをなげうってサッカーをすする姿に打たれるのである。

私の母校である広島大学付属中・高校のオーケストラが全国の数本の指に入ると聞き、第37

回(平成25年)の定期演奏会を聴きに行ってきた。詳しくは別に書いたので省略する。もちろん、プロと比べるとヴァイオリンなどの弦がヴィブラートがかかっていないところもあり、(コンサートミストレスなどはキチンとかかっていた)弦の演奏に膨らみが少ないなどの難はあるが、私は感激した。聞くところによると、中学校に入ってからヴァイオリンなどを習うらしい。そして中学2年から高校2年までの4学年がステージに立つという。それは毎年メンバーが少しずつ変わっていることを示す。しかしその質を落とすことなく続けている姿は素晴らしい一言に尽きる。今年のメインはベルリオーズの「幻想交響曲」であった。これはE♭のクラリネットも必要だし、さすがにハープは賛助出演であったが、演奏自体素晴らしいものであったし、こんな大曲に挑戦する姿が頼もしい。

私が感心した数例を上げたが、いずれにしても私が高校生のときには考えられないことであり、私はそのころ何をしていたのであろうかと、この歳になって反省する。私には到底マネのできないものばかりである。私は青春時代はボーと過ごしていたように思えるのである。

だから、最近の若い者は素晴らしい者もいるとしか言いようがないのである。

## 医と文—落柿舎断想

日本赤十字広島看護大学 宇野 久光

ACP Japan Chapter (米国内科学会日本支部)の年次総会が昨年5月に京都で開催された。この会では若い内科医や学生を米国方式で教育育成している。英語による各種教育講演、症例検討や研究発表など、若い彼らは素直で、臨床医学に対する熱意が強い。

ACPの日本語翻訳を担当していたころ、Annals of Internal Medicine に、“On Being A Doctor”という医師の投稿エッセイ欄があった。内容は医療や患者の思い出などが主であったが、中には素晴らしい文学的な物語や詩などもあり、米国医師の教養を垣間みた。

ACPは“The Last Half Hour of the Day”という、医師のための掌編集を出版しており、これは、内科学の父William Oslerの“Aequanimitas”の中の“Start at once a bed-side library and spend the last half hour of the day”から

とったタイトルである。

Oslerは、「専門職とはかく度量を狭くし視野狭窄に陥りやすく」、「医学という仕事に携わる者は、その仕事の性質上、人との接触を持つ機会が多い。そのため他の職業に就いている人よりも高度の教養が必要とされる」、と述べている。

学会2日目に、嵯峨野の落柿舎を訪ねたが、かつての郊外の風情はなくなってきていた。落柿舎は蕉門十哲の一人、向井去来の別邸であったものを、去来没後、再興、移築したものである(写真)。

落柿舎の裏手に、高さ30cm位の小さな去来の墓がある。ここを訪ねた高浜虚子は、

凡そ天下に去来程の小さき墓に詣りけりと、その人柄を敬慕している。

去来の父はオランダ医学を学び、天皇から下賜の品を受けた程の医師であった。医家の仕事は兄が継ぎ、去来は仕官の誘いを断り、兄の仕事を手伝った。世間的な名声を一切望まない人で、生涯独身で過ごした。その句は、元禄の武人としての素養と人柄を表して清虚である。芭蕉は、このような清廉な去来を最も信頼し、「西国の俳諧奉行」と呼んだ。

芭蕉は、元禄2年の「奥の細道」を終えた後、2回ほど落柿舎を訪れている。最初は奥の細道の旅を終えた元禄2年で、二度目は最も滞在の長かった元禄4年で、「嵯峨日記」はその時の滞在日記である。嵯峨日記の最後は、

五月雨や色帯へぎたる壁の跡  
で終わり、嵯峨日記はこの句に向かって収斂しているともいえる。

ちなみに、芭蕉はこの滞在中、「猿蓑」の監修をしている。芭蕉の俳諧は奥の細道の後に変貌した。その蕉風を代表する発句・連句の撰集を編んだのが「猿蓑」で、去来と野沢凡兆が編集した。

芭蕉の門人には医師が多い。蕉門十哲の第一

といわれた江戸の榎本其角<sup>きかく</sup>は、上方旅行中に芭蕉の危篤を聞き、病床に駆けつけた医師である。また、件の「猿蓑」の編集に当たった凡兆も京の町医者であった。

戦前は大学俳句会が盛んで、新興俳句運動の推進力となった。「馬酔木」<sup>あしび</sup>によった東大俳句会の産婦人科の水原秋桜子は、客観的写生を唱導する虚子と対立し、同誌に「自然の真」と「文芸上の真」を発表し虚子と決別した。

「京大俳句」を創刊した精神科の平畑静塔は、医専教授や病院長を歴任した。「自由主義」を掲げた京大俳句は、新興俳句運動の尖鋭的存在として活動したために平畑も検挙された。

九大俳句会を設立した横山白虹は、外科講師、病院長を歴任したが、俳句は「強靱な詩」であり现实生活に密着したものであるとした新興俳句の代表的作家であった。

嵯峨嵐山からタクシーで、愛宕山東麓を南に流れ保津川と合流する清滝川を訪ねた。名前どおりの、清冽な溪流である。芭蕉は死の前日の病床で、三度目の落柿舎滞在中に清滝川で詠んだ自句の改案を弟子に示し、これが絶句となった。

清滝や波に散込<sup>ちりこむ</sup>青松葉

再び、電車で市内に向かい、若き医師たちの学会会場へと向かった。



嵯峨野の落柿舎

## 税務相談室・融資相談室のご案内

本会の福祉活動の一環として、「税務相談室」および、「融資相談室」を開設しております。無料ですのでご遠慮なくご利用ください。

記

### 『税務相談室』

※医療税務、一人医療法人などについて  
と き 平成26年1月9日(木)、16日(木)  
午後2時～午後5時(1人1時間程度)  
ところ 広島医師会館内 5階会議室  
担当者 中国税理士会 広島県支部派遣税理士  
米今 喜作 清水 弘司

### 『融資相談室』

※新規開業、事業拡張、事業承継などについて  
と き 平成26年1月16日(木)  
午後2時～午後5時(1人1時間程度)  
ところ 広島医師会館内 5階会議室  
担当者 金融機関 金融サービス(医療専門  
チーム)担当者

予約申込先

〒733-8540 広島市西区観音本町1-1-1  
広島県医師会経理課 TEL: 082-232-7211